
螢火

浦沢 桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

螢火

【NZコード】

N8085M

【作者名】

浦沢 梓

【あらすじ】

どこか冷めて人間不信気味な沢田千波はふとしたことから小さい頃過ごした田舎へ戻ることになる。

そこで出逢った人達と関わるうちに千波の中に小さな変化が起きていく。

1・1・変化の始まり（前書き）

はじめまして

浦沢と申します。

こういった場で文章を書くのは初めてで表現も分かり辛いかもしが、頑張って書いていくのでよろしくお願いします

1・1・変化の始まり

ミーンミンミンミンミンミンミンミン

7月21日快晴、気温35

夏の日差しが降り注ぐ　といつよりは直射日光が直撃する川沿いの
土手

そこに立ち並ぶ桜の木は今は花ではなく蝉の鳴き声が満開だ
桜の木が作り出す木陰だけが唯一涼しい気分にさせてくれる
あくまでも気分だけだが

そんな炎天下の中自転車をこぐ2人がいた

「あ、づ、い、い、い、ー」
「ほんと、どうかしちゃいそう。」
「暑い暑い暑い暑い暑い」
「」
「。」

先程から”暑い”以外の単語を発しないのは沢田千波

真つ直ぐな長い茶髪に化粧で少しキツイ目付き
一見クールと見て取れる彼女だが実際は

「暑い。もう駄目だ。熱中症で死ぬんだ。」

そうでもなかつたりする

クール、冷たいといった印象を持たれるのは彼女が人見知りだから
だろう

「大丈夫だよ。毎日それ言つてるけど死んでないでしょ。大丈夫大
丈夫」

駄々っ子をあやす様にそう言つるのは岡崎月乃
肩までのふわふわな明るい茶髪

千波は目が切れ長なのに対月乃は垂れ目
何だか対極のようないるだ

「でもこれも後ちょっとの我慢だね。明後日は終業式だ」

二人は高校生だった

そして一人の通う高校は2日後に終業式を控えていた
つまり3日後には夏休みというわけだ。

まあ一人とも3年生なので夏休み中も補習やら何やらがあるわけだ
が。

「あ、私今日寄るところがあるからここでバイバイなんだ。」

「わかつたー。じゃあまた明日ね

「うん、バイバーイ」

そう言つと円乃を乗せた自転車は小さな橋を渡り川の向こう側へと曲がつていった

「ふう」

話し相手がいなくなつたことで余計に暑さを感じるよつた氣がした
千波は、ひたすら無心で自転車をじるつとした

「あつついなあ」

呴いた言葉は誰の耳に入るでもなく夏の暑さに溶けていった

ガチャ

「ただいまー」

家に着くと千波は玄関の扉を開け誰もいない家にそう言つと部屋の
クーラーを付けバスルームに入つていつた

「」で少し沢田家について説明をする

家族構成は

母：さきえ沢田咲枝

娘：沢田千波

鳥：金子さん

の三人（正確には二人と一羽なのだが、千波は”羽”とカウントするのを嫌う）

咲枝はビジネスウーマンで忙しい為か千波に対しては大分寛容だ
”放任主義”という言葉の方が当て嵌まる気がしなくもないが自由
人な千波にはその方が気楽で良かつたし、愛情が無いわけでは決し
てないことを知っていたから、そんな母親を普通に好いていた

暫くするとバスタオル一枚でバスルームから出てきた千波は部屋に
行き部屋着に着替えると金子さん（真っ白なオカメインコ）を籠か
ら出してあげた
冷房の効いた涼しい部屋を金子さんが嬉しそうに飛びのを眺めてい
ると

玄関の扉の開く音と共に
「ただいまー！…千波帰ってる？」
といつ声が聞こえてきた

「咲ちゃん？」

玄関へ向かつと咲には黙りに顔をしかめた普段は喧嘩は家に居ないはずの母親

「どうしたの？」

声を掛けると

「ちょっと話があつて帰ってきたのよ」 そう言つて重そうな鞄を持ってリビングへ向かつたのでわけがわからぬまま千波も後に続いた

咲枝はエアコンを付け冷蔵庫から冷たい麦茶を出すと、それをグラスに注いだ

「あんたも飲む？」

千波が黙つて首を横に振ると咲枝は麦茶を一気に飲み干した

「で、どうしたの？」

「ああ、そうだった。私しばらくアメリカに出張になつたのよ。今 日帰りが早いのはそれもあるんだけど」

「へー。気をつけてね」

出張の多い母親に対し、特に驚くこともなくやつぱり

「だからその間あんたはどうするか聞こうと思つて。家にいるんでも良いけど折角の夏休みだし　久しぶりに新潟に戻る気ない？　実は千代さんが、よければうちにおいて言ってくれてるのよ」

一気にそいつ言つと咲枝はまたグラスに麦茶を注いだ

千代さんは二人が新潟に住んでいた頃、辺り一帯の土地を所有していた地主で本名は明間千代子。

咲枝は都会育ちだったが、千波が小さいうちは自然の多い所で暮らそうと決めていたので、少し不便だが緑豊かで綺麗な村に一人は住んでいた

けれど父親がいない手前咲枝が働かなくては生活が成り立たない、ということでお千波はよく明間千代子に面倒を見てもらっていた
千代子は鬼の様に厳しく、千波はよく叱られたが今思えばそれらの中にも優しさがあつたし、甘やかされたことも多かつた様に思えた
咲枝と千代子は仲が良いらしく今でもたまに連絡を取り合っているらしい

そして今回のこの新潟行きの話が出た訳だ

自然大好きな千波がこの話を断る筈もなく

「行きたい！」
と即答した

「せうだらうと思つて行くつて言ひてあるわよ。夏休み入つたらおいでだつて。私がアメリカから帰るときは連絡するけど、まあ好きなときに帰つてきなさい。ただ、ちやんと事前に帰る日付を千代さんにおい」と。

「はーい

「じゃあこれ。往復分の切符

「買つといてくれたんだ。ありがとう」

「いーえ

そんなこんなでこの夏休み私は一人で新潟へ行くことになつた
懐かしい場所だけあって、私は珍しくもわくわくしていた

「一応受験生なんだからちやんと勉強もしなさこよ」

いつの間にか一杯目の麦茶を飲み干した咲枝は言った

「分かつてるつて

パンパンパン

「新潟あ？」

黒板消しを窓の外で叩きながら月乃は聞き返した
ちなみに今は終業式前日の大掃除だ
大掃除は面倒ではあるがこれから長期休暇が始まると懇うつと楽しく
思える

「新潟があ、良いなあ。でも講習とか文化祭準備はどうするの？特に準備はちゃんと出なきや文化祭委員が怒るぞ～」

自分がだけが参加しないわけにはいかないのでちゃんと準備には参加するつもりだが千波にはどうしても解せないことがあった

どこでもそうなのかもしねないが、女という生き物は協調性を大切にしたがるらしい

否、協調性といえば聞こえが良いが女のそれは少し違う様に思える

ビートでもリーダー格の人間がいる

そしてその人間が発言をすれば右に習え

要するに自分がだけがはみ出すことを極端に恐れるのだ

千波や月乃の性格が自己中心的であるだけかもしれないが、そんなタイプの女は千波には自分がない集団にしか思えなかつた

ちなみに、千波が仲良くしている子達は良くていいえれば自分を持つてゐる、悪くいえば血口の中。そんな子ばかりだが、そこが彼女には居心地が良かつた

「準備はぢゅうじんと出るよ。夏休みすまつとあつちにこむわけじゃないからさ」

千波は箒の柄に手の平をのせ、そこに顎を置きながら面倒臭そうに答えた

「そつかあ。何だかんだ最低限の協調性は持てるよつになつたんだね

中学の頃から千波を知つてゐる月乃はからかいつゝひそつた
「なにやー」

と、その時ふと一瞬煙草の臭いがした
そして月乃の耳にクラスメイトの女の子の声

「うーわ、臭い」

「どうせまた佐野でしょ」

「ほんと最悪。知ってる？あいつってさー

「え、それまじで？」

そこまで聞いて、月乃是もう話が耳に入らないよう努力した

聞く側は気分が良いものじゃないな

月乃もあの子達の噂話の的となっている佐野を別に好きではなかったのだが

ふと千波を見ると彼女は臭いにだけ気付いたようだ

「う、うげー。煙草の臭いだ」 極端に煙草が苦手な千波は早くも氣分が悪そうだ

「大丈夫？」

「うん、一瞬だつたから」

「そつか。良かった」

学校が終わるまでの日の帰り

月乃はさつさと選び外で先にアイスを食べている中、

千波は西瓜の形の某アイスか当り付きの安い某アイスかで迷つていると横から声を掛けられた

「ちーなーみつ！」
そちらを向くと

「セナー…どうしたの久しぶり！」

期末試験が終わって以来学校に来ていなかつた友達、瀬永穂がいた

セナはちょうど付き合つて1年記念日に彼氏に振られたと言つてシヨックで立ち直れなかつたといつ。長い黒髪にパツン前髪は清楚といつよりはロリータというのだろうか。そんな印象を受ける

名前は穂だが、男みたいで嫌だ、と言つてセナと呼ばせている
”穂”でみのると読むなんて格好良いのにな、とみんなは思つてゐるが、名前の話をする怒るので、思うだけに留めている

「あまりのショックに引き込もつてました」

千波の問いに正直に答えるセナ

「何言つてんの！明日は終業式だよ。来るんでしょ？」

「うん。もう大丈夫 多分」

「良かった。みんな心配してたからさ」

「ありがとう。じゃああたしこの後バイトだから」

「あ、そうなんだ。頑張つてねー」

「バイバイ」

セナとバイバイをした私はアイス（散々悩んだ結果西瓜にした）を
買って外に出た

すると外ではクラスの男子が月乃と何かを話していたのか、丁度さ
よならをしている所だった

「お待たせ。あれ、誰だけ。クラスの男子だよね」「いい加減名
前くらい覚えなよ。どんだけ興味ないの。渡辺だよ。密かに入
気の」

「へー」

千波は大して興味もなさ気にアイスの袋を破きながら返事をした

「 千波つて今は彼氏作る気ないの？」

既にアイスを半分以上食べ終えている月乃が言った

「あー 。そうだね。私ちゃんと好きになつた人と付き合つ
ことにしたんだ」

「一時期千波、男遊びす」かつたもんね

「遊んだんじゃないよ。付き合つ期間が短いだけ」

月乃は何か言いたげだつたが何も言わなかつた

「さつ、行いつか！」そんな月乃を氣にも留めず千波は元氣に言った

その日の夜

部屋の片付けその他諸々は恐ろしい程苦手な千波だが旅の支度は別だ
いそいそとキャリーバッグへと荷物を詰めていく

「下着～、着替え～、カメラ～、勉強道具～、お菓子～」

ぶつぶつ独り言を言いながら部屋の中をうろつく

「ギョキョギョウ～」

隣にいた金子さんが不意に喋り出した

「あと金子さんでしょ　　あつ、充電器充電器ー。」

何度も荷物を出し入れして忘れ物のないようにする千波の気分は遠

足前夜の小学生のそれだ

「よしひ、完璧 げつ一閉まらないーー！」

＊＊＊

同じ頃、

岡崎月乃是男友達からの恋の相談と睡魔に頭を悩ませていた
キューピッド役などは彼女の性ではない
顔に似合わずサバサバした月乃からすれば
『恋愛は他人が絡むとややこしくなる』だけなのだ

「俺もあ、沢田さんが気になるんだよね」
受話器の向こうからは例の”渡辺”の声

「じゃあ好きって言えば?」「でもあんま話したことないし沢田さ
んつてクールで近寄り難いっていうか」

苛々苛々。

クール？千波が？あの沢田千波？

ただ人見知りだから無愛想なだけでしょうが
私に相談なんかしてないで勝手に解決してくれ
これが噂の草食系ってやつか？

あー 眠い。ほんとに眠い。

「大丈夫でしょう。振られてももう夏休みだし」

「そんな、いくらなんでもそりゃな 」

プツッ

心の隅で悪いなと思いながら月乃は電話を切った
睡魔に勝てるものなどありはしないのだ

* * *

一方瀬永穂はといふと

「髪切るつかな 。別人になるくらいのイメチェンがしたいな」

自分改革について考えていた

「大丈夫、私は強い子。泣かない泣かない泣かない」

* * *

7月23日

サウナ状態の体育館で意識が飛びそうになるのをなんとか堪え、終業式は無事終了した

体育館から出ると、気温36 のはずの外が涼しく感じられた

クラス中が夏休み前で浮かれている騒がしい中、担任によつて通知

表が配られた。

千波はなんだか急に受験生なんだ、という気分になり言い知れぬ不安が広がった。突然先のことが怖くなつたが今は忘れよう、と夏休みの楽しい計画を考えた

「千波ー。月乃ー。バイバイ」

自転車置場で二人を見付けたセナは一人に手を振つた

「ばいばーい」

「夏休み遊ぼうねっ。千波は新潟行くんだってね！お土産よろしくね

「任せてー」

「メール頂戴ね~」

そう言いながらセナは走り去つた

「元気そうで良かった」

「ほんとにね。じゃ、うち等も帰る」

二人が自転車に乗り、帰ろうとしたときだつた

「あの、沢田さんちょっとといいかな」

渡辺が千波に声を掛けた

「あたし先行ってるね。コンビニにいるから
そういうと用乃是スースと行ってしまった

「何？（知らない人と話すの嫌だなあ）」

「あ、あのや（やつぱ）の子近寄り難っ！まあそこが素敵なんだけ
ど」

「よかつたらアドレス教えて欲しいなー、って」

「アドレス？別に良いけど」

そう言って赤外線でアドレスを交換すると

「ありがと
いいえ～」

そんな社交辞令みたいなやり取りをして渡辺と千波はその場を後に
した

そんなやり取りを無言で見ていた人間には気付かずに

コンビニに向かうと
月乃は外の簡易ベンチに座つていた

「待たせちゃって」めんね」「全然良いよ。で、渡辺は何だつて
？」
「アドレス教えてつて。」
「それだけ？」
「そうだけど」
「ふーん（あのチキンー）」
「じゃ、帰るつよ」
「うん」

二人は自転車に乗り、いつもの川沿いの道を走つた

自転車が感性の法則に従い急な坂を滑り落ちるなか空を見上げてみると、千波は何だか無性に叫びたくなった

7月24日AM09:36

ブルルルルルル

駅のホームに新幹線の発車の合図が鳴り響きしばらへ経つとゆっく
りと列車は動き出した

今、千波は新幹線の中に居た
ぎりぎりで駆け込んだ為乱れた息を整えながら自分の席を探す

千波の住む町から新潟へ行くのには新幹線を使って3時間程かかる
そこから各駅停車の電車に乗り換え更にバスに乗り、また更に歩いた所でやっと目的地である明間千代子の家にたどり着く

よつやく自分の番号の席を見付け、足元にキャリーバッグを置き（
重くて持ち上がらないので上には乗せられなかつた）窓際のシート

に腰掛けると一息ついた
隣の席には人は座っていない

通り過ぎていく窓の外の景色に少しづつ緑色が増えていくのを眺めてるうちに、千波はなんだか眠くなってきた
(昨日楽しみでなかなか寝れなかつたからなあ)

目を閉じて深く息を吸うとそのまますうっと眠りに落ちていった

* * *

AM10:07

その頃、例の草食少年

渡辺裕之は携帯の画面を睨みつけていた

「返信がこない。。。」自分でもヘタレだなあと思つが仕方ない
こんな彼だからこそ不本意ながら”草食”と言わてしまつのだ

* * *

しばらくすると列車の揺れる音で目が覚めた
いつの間にか眠ってしまった

窓の外に田をやるとそこには川が流れていて川辺では子供が網を振り回しているのが見えた
外にはもう建物は数える程しか見当たらない

規則的な列車の揺れを感じながらぼーっとしていると車内にアナウンスが流れた

次に留まる駅のそのまた次が新潟だ

ふと、自分が空腹であることに気付いた
そういえばまだ何も食べていなかった
バッグの中からおにぎりの詰め合わせとお茶を出す

ちなみに新幹線に駆け込む羽目になつたのは、このおにぎりを選ぶのに時間が掛かりすぎた為だ

やつこつこつといふうちに列車が停車した

次はどうどう新潟だ

同じ頃、東京のファミレスでは岡崎月乃と瀬永穂が役割分担をしながら宿題を片付けていた

宿題を中断し、パフェの苺をつついでいたセナは口を開いた

「あたしね、特にやりたいことがないの。だから何となく大学行くだけなの。親に心配かけたくないし」

「それなら私もそうだよ。殆どの人がそうじゃない?」月乃が答えるとセナは首を振った

「わかつてる。わかつてるけど、夢中になれる何かが欲しいなって思うの。私は月乃みみたいに冷静になれないし千波みたいに他人の目を気にしないで堂々ともできない。自分にすら自信が持てないんだよね」

セナは散々つづいた苺を口に入れるとうなだれた

「あー 確かに千波は人のこと気にしないけど。私、あれは欠点でもあると思うよ」

「どうして? あたしには羨ましいけど」

「自分の世界でしか生きられないのは問題だと思う。千波はセナみたいに人懐っこいのを羨やんでたよ」

「うーん わかんないなあ。」

「受験のストレスで考え過ぎてるだけだよ。」そう言つと田乃はク
リームソーダのアイスを一口食べた

その時不意に

「ねえ、岡崎さんに瀬永さん」

一人に声をかけてくる人影。

その意外な人物に一人は驚いた

* * *

田舎道を走るバスに揺られること数十分

千波は田んぼと田んぼの間の道の小さなバス停でバスを降りた
道は車がぎりぎりすれ違うことができる程度のものだ

日光がジリジリと皮膚を焼くのを感じながら千波はひたすら田舎道
を歩いた

記憶の中の景色と何一つ違わないそれを見ると、なんだか不思議な
気持ちでいっぱいだった
何かが込み上げてくる気がするのはきっと暑さのせいだろう

キヤリーバッグをゴロゴロと引きずる音を響かせながら歩く千波の
意識は朦朧としていた

新潟つてもつと涼しいものじゃなかつただうづか

そんなことを考えながら歩いていると不意に木陰に入った
見ると道の脇に大きな桜の木が堂々と立っている

そしてその下には立派な門が。

嗚呼、やつと

「 ただいま
意識せずとも口から出た言葉だった

門をぐぐると広い庭の「」へ一部が見渡せた
そこは句一つ変わっていなかつた

細く流れる小川も石畳のビビも庭の隅に佇む風化が始まっているん
じやないかと思わせるほど古い木造の物置と、取り壊されること
なく幼いころの記憶のままだ

この位置ではよく近所の子達と秘密基地「」をして遊んだものだ

「うなちゃん? うなちゃんかい?」

そのとき、不意に声を掛けられた

声のした方を見ると縁側に和服を着た女性が立っている

「おばあちゃん! !

千波はそう言いつと荷物もまつたらかして駆け出した

「それにしても本当に久しぶりだねえ」

「10年ぶりくらいじゃないですか」

「敬語なんか使えるようになっちゃって」

千波と千代子は今、広い庭の正面を見渡せる和室で向い合わせに座つている

この家には昔からクーラーが無い

外には見るだけで暑くなるような真夏の景色が広がつている

唯一気分だけでも涼しくさせてくれるであろう風鈴も無風状態の今では本来の役割を果たさない

この人は暑くないのだろうか、と千波は千代子を見遣つた

千代子は昔と何一つ変わっていないように思われた

仕草もはつきりとした話しか方も老人とは思えない程強い眼差しも

千波は自然と背筋が伸びるのを感じた

「それで、」

千代子が持っていた湯飲みを置いて話しかけたので、千波は更に姿勢を正した

意識しなくともつらうしてしまつのだ

「咲枝とはちやんと話をしてるのかい?」

「仕事は忙しいみたいだけど話すときは話しますよ」

「家には大抵一人かい?」

「まあ、そうですね」

「寂しくはないのかい?」

「全然。だつて一人でいるのって楽だし。一人のが好きですよ」

千代子は何か言おうと口を開いたが庭から聞こえた声によつてそれは遮られた

「おーばーあーちやーん!..」「蝉捕つた!..」

「工作手伝つて!..」

「うわあああああん」

「コタ泣き虫!..」

「ばあちやーん、腹減つた!..」

各自バラバラな台詞を叫んでいる

千代子は溜息をつくと

「近所の子らが来たねえ。後で紹介するからね。先に荷物整理しちゃつておくれ。」

「わかりました」

「部屋はあれね、昔使つてたのを使いなさい」

「はーい」

千波は部屋に向かおうと廊下に出た

後ろからは千代子が子供達をあやす声が聞こえてきた

「　あの人は変わらないな」

さあ、早く荷物を片付けてしまわなければ

辺りは既に暗くなっていた

何処からか蛙の鳴き声が聞こえる

荷物を整理し終わり一段落した部屋に布団を敷き、千波は横になつていた

あの後結局近所の子供達は千代子の家で夕飯を食べることになった
夕食の席でもやはり子供達は騒がしかったが千代子の一聲で大人し

くなつたのを見て、やがて「この人は流石だと思つた

携帯を開くとメールが来てることに気付いた

「終業式の日にアドレス聞いた渡辺です。登録よろしく（<ーー>）
夏休み空いてる日とかある？良かつたら今度遊びに行きませんか？」

返信し終わると、今度は
知らない番号から着信があつた

（あ、電話。）

出でつかどうじようか迷つた末、千波は電話に出でました

「もしもし?どうぞ
「あー、もしもし?沢田千波?」
「」
「」。

名乗りもしないでいきなり人のフルネームを言つなんて失礼なんじ
やないのか
少しムツとして黙つていると

「あ、悪い。俺、佐野だよ。岡崎さんに番号聞いた。同じクラスの

佐野。 つても沢田さんのことだから覚えてないか」

佐野？ 佐野って誰だ？

「『めん、誰だか思い出せない』

「だれと迷ったよ】

電話口の向い側で佐野とやらが呆れたように笑つてゐるのが聞こえた

「まあ良いや。用件とこはなが、俺、沢田さんが好きってか気に入るんだよね】

相手の言葉を理解しようとしていた千波はん？

と首を捻つた

「 はい？」

「終業式とき渡辺が沢田にアドレス聞いてたの見てたからやー。俺もうかうかしてらんねえなつて思つた訳。今東京にいないでしょ？ 帰つたら遊びよ】

「なんで知ってるの
つて、月乃達しかいないか

千波は心の中で溜息をついた

「あー、そのうちね

「ちょっとー俺本気だからねーー」
「わかつたわかつた。もう切るよ
「また電話するか
」

千波は電話を切ると携帯を放った

「恋愛なんて馬鹿みたい」

寝返りを打つと墨の為かいつもよつ元氣のない金子さんが田に入
つた

「ね。金子さんもやつ狂ひでしゅうへ。
好きなんてー一時の

今日一日の疲れが出たのだらうか
千波の意識はすうつと落ちてこつた

* * *

その頃、月乃の部屋では
勉強会という名のお泊り会が開かれていた

「勝手に携帯教えちゃって千波怒つてんだろうなー」「でもさ、なんで佐野があの子の番号知りたがつたんだろ」「やっぱ気になつたんじやないの？千波モテるし。なんにしても

」

ポテチをつまみながら月乃是複雑そうな顔をした

「佐野だけはやめてほしいよね」「あー、良くな思われてないよね」

ポテチの袋が空になった

「コンビ二行かない？」

ガールズトークはまだまだ続きそうだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8085m/>

螢火

2010年11月17日02時50分発行